



吉川英梨

2011年3月11日14時46分、私は布団の中でうなっていました。長男を妊娠中でつわりに苦しんでいるときでした。24時間ずっと気持ち悪くてすっきりしない……そんな状態のとき、突然、激しい揺れに見舞われました。生まれて初めて赤ちゃんを授かったのに死ぬのかなあ、職場の夫とはこのままお別れになるのかな……と布団の中で恐怖に震えていたのを覚えています。

それから9年後の2020年3月11日の早朝、私は小学生になった長男と、震災後に生まれた次男の世話を夫に頼み、東北に向かう新幹線はやぶさに乗り込みました。

海上保安庁を舞台にした小説

「ぜひ書いて」震災語り部の言葉が後押し

『海蝶』の第1稿ができあがっており、第2稿の手直しをしているときでした。主人公は、震災で母親を亡くしたことを機に海上保安庁の潜水士になることを決意した女性海上保安官。東日本大震災は大量の資料や映像があります。原稿もできているし、震災のシーンも書き終わっていましたが、どうしても東北に行かねばならない、しかも3月11日にと決めていました。この日に現地^{現地}に足を運ばずして、震災でなんの被害も受けなかった私が、あの震災のことを書く資格があるのか、という強烈な強迫観念がありました。

作品の中で取り上げたのは宮城県気仙沼市です。海上保安庁DVDシリーズvol.1『海上保安官が見た巨大津波と東日本大震災復興支援』で、実際に気仙沼海上保安署の方が撮影した、気仙沼の街をめちゃくちゃにしてい

気仙沼保安署 昨年3月11日、筆者写す



く津波の映像を見て、これを書く^{書く}と覚悟を決めたのです。

気仙沼は、海鳥の声と、漁船のマストがぶつかり合う音が絶えず聞こえる、やさしい街^{まち}でした。14時46分の1分間の黙祷^{もくたう}サイレンが鳴り響いたとき、私は気仙沼魚市場^{いしや}にいました。背中を丸め、ひたすら両手をこすり

合わせていた女性の姿が、いまでも目に焼き付いています。

その後、私は主人公が実際に避難した道を逆にたどるよう^{よう}にして、気仙沼海上保安署から松岩^{まついわ}という地区まで2時間以上歩き続けました。ホテルでは、早速原稿に、今日一日の取材を通し五感^{ごかん}で得てきたものを、書き加えていきます。

翌日は、気仙沼震災伝承館^{でんしょうくわん}で語り部の方から当時の話を聞^きてきました。語り部の方に見学の動機^{どうき}を訊^きかれたとき、これが小説の取材であることを話しました。3階の階段の壁に残る無数の引^ひつ掻^かき傷^{きず}を見ながら、あの震災でなんの被害も受けていない自分が、震災を題材^{たいざい}に小説

を書くことへの罪悪感や葛藤^{かつとう}があることを、正直に話したところ、語り部の方はこうおっしゃいました。

「もうすぐ震災から10年。風化はもう始まっています。最近、見学者から質問される^{しつもん}ことが増えてきたのは『なぜ津波が来る前に避難しなかったのか』ということです。みな、指定の避難所に避難^{ひなん}したし、過去の大津波で一度ものまれなかった高台に逃れたんです。そういう場所が殆ど津波にのまれてしまった。あれはそういう震災^{しんさい}だったのですが、最近はそれを忘れてしまっている人が増えてきていて、残念です」

ぜひ書いてください。語り部の方の言葉は、大きな後押しになりました。

『海蝶』は今年の秋にも第2作目の執筆を開始します。気仙沼の復興や行方不明者の潜水捜索^{せんさく}について、書き続けていきたいと思っています。(つづく)

＝次回は3月25日号

気仙沼の復興や行方不明者の潜水捜索について、書き続けたい